

# 別科修了生の直面している日本語の問題

大河原 尚

## 1. はじめに

「コース・デザインは、追跡調査をもっていちおう完結する。」(田中, 1988: 215)。コース終了後、修了生がコース開始時に設定した目標領域で、ちゃんと日本語が使えるかどうかを調査し、そのコースの成否を確認する作業である。さらに、そこで得られたデータは、次回のコース・デザインを行う際の基本資料となるのである。

大東文化大学別科日本語研修課程(以下、別科)においても、学部進学を目的に一年間の日本語教育を行っている。しかし、別科開設以来、約二十年の間、一貫した目的でコースが運営されて来ると、経験による多少の修正を除けば、それまでのコース・デザインの見直しは、ほとんど行われなくなってしまった。

そこで、別科のコース・デザイン見直しの一環として、アンケート調査を行った。調査では、別科を修了しその推薦制度によって大東文化大学(以下、本学)の各学部に進学した修了生を対象に、彼らが普段の学部授業で困難を感じている日本語の問題について調査した。

## 2. 別科の問題点

今回の調査の出発点として、次のような別科の抱える問題点がある。別科の目的は、一年間の日本語教育で、本学学部での勉学に十分な日本語能力を養成することである。そのため、入学希望者には、少なくとも初級終了程度の日本語能力(「日常的な日本語の理解・表現力」(『2000別科日本語研修課程募集要項』))を有

することを、入学の一応の条件としている。ところが、実際に入学してくる学生の中には、その条件からかなり外れていると思われる学生も少なくない。そうした学生が別科の目的とするレベルにまで到達するには、一年では到底時間が足りないのである。結局、学部での学業に必要なと思われる十分な日本語能力のないまま、推薦制度によって学部進学を果たすのである（大河原,1998）。

しかし、十分な日本語能力がなくて苦勞するのは、当の学生自身である。そうした学生たちは、実際の授業や講義の中で、どのような問題に直面し、それらをどのように処理しているのか。あるいは、そうした過程で、別科では身につけることのできなかった能力や技能を身につけながら、問題を解決していつているのか。

コース・デザインの見直しという観点からすれば、そうした学生たちが困難だと感じている問題、さらにはその対処の方法を知ることが、現行のコース・デザインを評価し、見直していく上で、一つの手がかりとなるはずである。

### 3. 調査方法

#### 3.1. 調査対象

調査対象は、平成九年度と十年度に別科を修了し、学部への推薦制度で本学の各学部へ進学した学生33名とし、その中で連絡がついたもの29名にアンケートへの回答を依頼した。その結果、11名から回答を得た。

表1は回答を得た11名の詳細である。

表1：回答を得た11名の詳細

学生No.	性別	学年	学 科	母 語
1	男	2	日 本 語	中国語
2	女	2	日 本 語	中国語
3	男	1	日 本 語	中国語
4	女	1	日 本 語	中国語
5	男	2	経 営	中国語
6	男	2	経 済	中国語
7	男	1	経 営	中国語
8	女	2	中国文化	中国語
9	女	1	国際関係	中国語
10	女	1	国際関係	中国語
11	男	1	国際関係	中国語

### 3.2. アンケート作成

まず、アンケート項目作成のために、予備調査を行った。平成九年度に別科を修了し、学部推薦制度で進学した学生2名に個別にインタビューを行った。インタビューでは、学部に入學してから大変だったことを、特に事柄を限定せずに自由に話してもらった。それらのインタビューの中から授業に関するところを抽出してアンケートを作成した。

作成したアンケートを、別の学生に事前に答えてもらい、その学生から、アンケートの設問について、回答しにくいものとその理由をコメントしてもらった。そのコメントをもとに再度修正を加えて、最終的なアンケートを作成した。

アンケートの内容は、これまで受講した科目の中で最も難しかったあるいは大変だったものを3科目選んでもらい、その選んだ3科目について、それぞれ講義、試験、レポートについてどのくらい難しかったか、また何が難しかったのかを答えてもらった。難しさの程度は、0%から100%までを十等分したスケールに、その程度を印してもらった。また、難しかった点については、予め用意した想定される選択肢の中から選ぶか、自由回答で回答してもらった。選択の場合は複数選択してもよいとし、更に自由回答を付け加えてもよいとした。最後に、大学(学部)での勉強全体に対して考えていること、それに学生自身の日本語能力について自由回答で付け加えてもらった(資料I参照)。

### 4. 結果と分析

まず、学生が難しいとして選んだ科目の講義、試験、レポートにおいて、学生がどの程度困難と感じているかを概観する。それから、それぞれ三つ(講義、試験、レポート)において、学生が困難と感じている点を、その程度と合わせて検討していく。次に、各々の困難の程度を比較し、選ばれた科目全体の中で、どんなことに困難を感じている程度が高いかを見る。さらに、大学での勉強全体を通じて、学生自身の日本語について、上の結果と照合しながら分析する。最後に、4月の授業開始時に各自の時間割を作成した際の基準(最も優先したこと)に、これまでの分析結果との関連で、簡単に触れる。

#### 4.1. 講義、試験、レポートにおいて感じている困難の程度

学生が難しいあるいは大変な科目として選んだ科目（3科目以下）について、その難しさの程度を回答してもらったのは、(1)講義で話される日本語の理解度、(2)そこで使用される印刷教材（教科書も含む）の日本語の理解度、(3)試験における問題の理解度、(4)答案として書いた日本語の満足度、(5)作成したレポートの日本語の満足度。これら五つの理解度及び満足度をまとめたのが表2である。

表2：講義、試験、レポートでの理解度と満足度

学生	科目	(1)講義の理解度(%)	(2)教材の理解度(%)	(3)試験の理解度(%)	(4)解答の満足度(%)	(5)レポートの満足度(%)
1	1	50	50	50	50	50
	2	50	50	50	50	50
	3	50	50	50	50	50
2	1	50	50	100	50	50
3	1	90	80	80	90	90
	2	90	90	90	90	90
	3	90	90	90	90	90
4	1	50	50	100	50	50
	2	50	50	—	—	50
	3	50	—	50	50	50
5	1	40	60	—	—	—
	2	50	40	—	20	40
	3	60	60	—	—	—
6	1	50	70	90	70	—
	2	50	60	60	60	60
	3	60	60	60	60	60
7	1	90	80	90	80	90
8	1	40	70	60	40	50
	2	50	50	60	—	50
	3	50	40	60	40	70
9	1	30	30	—	—	30
	2	30	40	—	—	—
	3	40	40	—	—	—
10	1	50	—	50	50	70
	2	60	—	—	—	50
	3	80	—	—	40	—
11	1	40	40	—	—	30
	2	40	10	—	—	—
	3	30	30	—	—	—

表1からわかるように、ほとんどの学生がその理解度あるいは満足度のどれかに50%から60%以下と答えている。つまり、ここで選んだそれぞれの科目の全体またはその一部に対して、ほぼ半分か、それ以下しか理解または満足していないと感じていることになる。

ところが、それに対し、学生3と学生7は難しい科目として選んでいながら、全てに90%か80%と答えている。これは、彼らが考えた「科目の難しさ」が、今回の調査で想定していた日本語による難しさではないことを示していると考えられる。したがって、以下の難しい科目に関する分析では、この2名の学生のデータは対象から外すことにする。

## 4.2. 講義における問題

### 4.2.1. 話される日本語の理解

まず、講義で話されている教員の日本語はどのくらいの理解度で意識されているのだろうか。表3は各理解度、満足度の科目数を程度(%)別に示したものである。

表3：理解度、満足度の科目数

％	(1)講義の理解度 (科目数)	(2)教材の理解度 (科目数)	(3)試験の理解度 (科目数)	(4)解答の満足度 (科目数)	(5)レポートの満足度 (科目数)
0	0	0	0	0	0
10	0	1	0	0	0
20	0	0	0	1	0
30	3	2	0	0	2
40	5	5	0	3	1
50	13	7	5	7	10
60	3	4	5	2	2
70	0	2	0	1	2
80	1	0	0	0	0
90	0	0	1	0	0
100	0	0	2	0	0
計	25	21	13	14	17

表2(前ページ)と表3が示す通り、選ばれた全科目数25のうち、学生10の第3科目の80%以外は、全て60%以下。さらに、60%と答えたのも3科目だけで、

残りの21科目は50%以下である。ほとんどの科目において、講義で話される日本語の半分以下しか理解できないと感じている。

では、講義で話される日本語にどのような困難を感じているのか。学生には、講義での先生の教え方について選択肢の中から複数回答で答えてもらった。その際、必ずしも困難をもたらすとは考えられないもの、つまり、むしろ学生の理解を助けるのではないかと考えられるものも選択肢として示した（資料 I 参照）。表 4 では、各学生がそれぞれの選択肢を選択した回数及び自由回答で答えた回数を示した。

表 4：講義での先生の教え方に対する回答数

学生No. 先生の教え方	1	2	4	5	6	8	9	10	11	計
1. 繰り返して教える										0
2. 留学生に熱心			1							1
3. ゆっくり話す										0
4. 例を引く	1									1
5. 板書する			1		1					2
6. あまり説明しない				2	1	2				5
7. 話し方が速い	1		1	1		1		1		5
8. 板書しない					1	1			1	3
9. 専門用語の多用	1			1		2	3	2	3	12
10. 声が小さい								1		1
11. 板書が薄い								1		1
計										31

総数で圧倒的に多いのは、9「専門用語の多用」の12回である。また、全31回のうち25回が6「あまり説明しない」7「話し方が速い」8「板書しない」それに、9「専門用語の多用」の四つに集中している。また、唯一理解度が80%とした学生10の第3科目においても、9「専門用語の多用」と7「話し方が速い」が選ばれている。

その一方、理解を助けるだろうと考えられる選択肢（1～5）では、回数は少ないものの、2「留学生に熱心」4「例を引く」5「板書する」が1ないし2回選ばれている。これは、教える側のそうした努力にも関わらず、それが必ずしも学生（別科修了生）の理解に結びついていないということを示している。

#### 4.2.2. 使用される教材の理解

教材理解の程度は、表3が示すように、講義の理解度ほど集中してはいないが、やはり60%~40%に全21科目のうち16科目が集中している。また、表2からも分かるように、学生6と8がそれぞれ第1科目で70%の理解度を示しているのに対し、学生9と11がそれぞれ第1科目と第3科目で30%。さらに、学生11は第2科目で10%と回答している。全体としては、約5分の4の科目がほぼ半分の理解しか得ていない。また、科目、学生によってその理解度の認識にばらつきが見られる。

次に、教材理解の際に困難だと感じている点である。学生には、各科目毎に教材理解の際の難しい点を複数回答及び自由回答で答えてもらった(表5)。1「何が難しいかわからない」には、「全然わからない」とだけした回答(学生9、第2科目と学生11、第2科目)も含めた。また、2「内容がわからない」は、日本語は分かるが、その内容がわからないということである。

表5：教材理解で難しい点(回答数)

難しい点	学生No.										計
	1	2	4	5	6	8	9	10	11		
1. 何が難しいかわからない					1		1	1	1		4
2. 内容がわからない	1		1	2	1	2					7
3. カタカナの専門用語	2	1	1	1	1		1		1		8
4. 漢字の専門用語							1				1
5. 会計の専門用語				1							1
6. 英語の文法								1			1
7. 教科書、教材不使用									1		1
計											23

目立って難しいのは、専門用語である。回答3、4、5のそれぞれの専門用語を合計すると、10回答で、全回答数の約半分を占めている。次いで2「内容がわからない」が7回答と多くなっている。つまり、これは両者とも日本語そのものというより専門分野と結びついた語彙またはそれ以外の何かが、教材理解の上での困難として受け止められている。

### 4.3. 試験における問題

#### 4.3.1. 試験問題の理解

試験の際その問題がどの程度理解できたと考えているのか。表2、3から分かるように、講義での理解度に比べよく理解できたと考えていて、試験問題の理解に関しては比較的やさしいと感じていることが分かる。40%以下という回答はなく、50%と60%（共に5科目）で3分の2以上を占めているものの、学生2と4の第1科目で100%、学生6の第1科目でも90%の高い理解度を示している。では、何が難しいのか。自由回答で答えてもらった（表6上）。

表6：試験問題及び解答で難しかった点（回答数）

学生No.											計
	1	2	4	5	6	8	9	10	11		
問題で難しかった点											
1. 単語の意味				1	1				1		3
2. 専門知識			1								1
計											4
解答で難しかった点											
1. 自分の考えを表現する	1			1		1					3
2. 日本語での表現の方法			1		1	1					3
3. 専門用語			1						2		3
4. 専門分野の文章を書くこと		1							1		2
5. 暗記すること					1						1
6. 短時間で書くこと											0
計											12

全体の回答数自体が少ないが、その中でも回答があったのは、1「単語の意味」（3回答）で、特に学生5と10はカタカナの言葉に難しさを感じている。2「専門知識」と答えた学生4は、1年生の選択科目『環境と資源』に出てくる植物の分類についての知識が問題理解の際に困難であったとしている。

#### 4.3.2. 自身の解答に対する満足度

試験問題に対する解答は、自分の思ったとおりに書くことができたか。これは、問題の理解度に比べ全体的な満足度は低い。表3でわかるように、回答数のほと



んど（14科目中12科目）が40%～60%しか、自分の書いた解答に満足していない。表2で見ると、学生5は第2科目で20%の満足度しか示していない。それに対し、学生6は、他の学生に比べ自身の解答に満足していて、第1科目で70%、第2、3科目でも60%の満足度である。60%以上の満足度を示しているのはこの学生だけである。

では、どんな点で思ったとおりの解答ができなかったのか。自由回答の結果が表6（前ページ）の下である。1「自分の考えを表現する」2「日本語での表現方法」は、いずれも学生が持っている日本語の知識をどのように使って、日本語として表現していくかということであり、全回答数の半分である6回答が集中している。また、このいずれかまたは両方を回答した学生数も全体（9名）の半数以上の5名である。

その他には、3「専門用語」4「専門分野の文章を書くこと」がそれぞれ3及び2回答の合計5回答で、全体の約半数の回答数である。これらは、いずれも専門分野に関する知識が必要とされる。ここでも、先に見た講義における問題と同様に、専門分野に関する語彙あるいは知識が、学生に、困難の大きな要因として考えられている。

#### 4.4. レポートにおける問題

今回の調査では、難しいとして学生が選んだ科目の全てにレポートの課題があったわけではない。レポートが課題としてあった科目は、17科目、なかったのは7科目である。レポートがあった科目全てに、その満足度を回答してもらった（表2）。

##### 4.4.1. 自身のレポートに対する満足度

まず、レポートでどんなことを書くことが課題とされたのか。選択式で答えてもらった結果が表7である。

表7：レポートの課題内容（回答数）

どんなことを書くレポートか	学生No.										計
	1	2	4	5	6	8	9	10	11		
1.自分の考えや意見			1		1	1	1	1	1		6
2.一冊の本をまとめる	1				1	2		1	1		6
3.複数の本をまとめる	2		1	1				1			5
4.自分の経験についてまとめる				1		1					2
5.他の学生の意見を聞いてまとめる			1								1
計											20

2「一冊の本をまとめる」3「複数の本をまとめる」は、それぞれ6、5回答で、合わせると11回答となり、全回答数の半数以上となる。その上、全学生9名のうち、7名から回答を得ている。この二つは、その作業の過程には違いがあっても、本から得た情報を組み立てて一つにまとめるという点では共通している。もう一つ目立つのが1「自分の考えや意見」である。6回答を6名の学生から得ている。これらの三つが圧倒的に多い。

次は、どのくらい思い通りに書くことができたか。表3を見ると、比較的50%を中心に集中している。40%~60%の範囲に全科目数17のうち13科目、特に50%には、10科目が集中している。また、表2を見ると、学生8の第3科目と学生10の第1科目で70%、それに対し、学生9と11の第1科目で30%の満足度となっている。

では、どんな困難があるのか。レポートを書き上げる上で、どんなことが難しかったか、さらにレポートの課題を行う上でどんなことが大変だったかを自由回答で回答してもらった。それらを一つにまとめたのが表8である。

表8：レポート作成で難しかった点、大変だった点（回答数）

難しかった/大変だった点	学生No.											計
	1	2	4	5	6	8	9	10	11			
1. 自分の考えを表現する			1		1		1		1			4
2. 日本語の使い方							1	1	1	1		4
3. 本をまとめること			1		1					1		3
4. 多くの本を読まなければならない									1			1
5. 文章(内容)がよく理解できない							2		1			3
6. 発表すること(口頭で)			1									1
7. 既定の枚数以上書くこと					1							1
8. 課題が教科書からではない					1							1
9. レポートのテーマを決める						1						1
計												19

1「自分の考えを表現する」も、試験解答のときと同様に、自分の考えたことを自分の持っている日本語の知識を用いてどのように表現するかということと考えることができる。また、2「日本語の使い方」では、「どのような言葉を使ったらいいかわからない」とする回答（学生9、11）もあった。そう考えると、この二つは、共に日本語を使っての表現方法における問題と考えられる。この二つは、それぞれ4回答、計8回答を得、さらに9名中6名が回答している。それぞれ3分の2以上を占めている。次に多い回答は、3「本をまとめること」と5「文章がよく理解できない」の各3回答である。3「本をまとめること」のなかには「文の要点をつかむ」（学生6）という回答も含めた。また、5「文章がよく理解できない」というのは、日本語そのものというより、本に書かれている内容またはトピックが理解できないまたは馴染みがないということである。

#### 4.5. 困難を感じている度合い

ここまで見てきた講義、試験、レポートにおける問題はそれぞれ相互にどのくらい難しいのだろうか。つまり、学生が難しいとして選んだ科目は、講義、試験、レポート全てにわたって同程度に難しいのか、それともそれらのなかに異なった程度の難しさを感じているのか。学生は何が難しいと感じてそれぞれの科目を選

択したのだろうか。そこで、ここでは表2で示したそれぞれの理解度及び満足度を比較して、その中のどれにより困難を感じていたかを見ていく。

次の表9は、それぞれの隣り合った理解度と満足度のうちどちらがより理解度または満足度が高いかを示したものである。また、表10はそれらの高低のパターンを、その科目数とパーセントで、それぞれの場合で示したものである。

表9：各理解度、満足度の比較

学生	科目	(1)講義の 理解度(%)	(2)教材の 理解度(%)	(3)試験の 理解度(%)	(4)回答の 満足度(%)	(5)レポートの 満足度(%)
1	1	50	—	50	—	50
	2	50	—	50	—	50
	3	50	—	50	—	50
2	1	50	—	50	/	100
	4	50	—	50	/	100
4	1	50	—	50	/	100
	2	50	—	50	—	50
	3	50	—	50	—	50
5	1	40	<	60	—	—
	2	50	<	40	—	20
	3	60	—	60	—	—
6	1	50	/	70	/	90
	2	50	/	60	—	60
	3	60	—	60	—	60
8	1	40	/	70	<	60
	2	50	—	50	>	60
	3	50	<	40	/	60
9	1	30	—	30	—	—
	2	30	/	40	—	—
	3	40	—	40	—	—
10	1	50	—	—	50	—
	2	60	—	—	—	—
	3	80	—	—	—	—
11	1	40	—	40	—	—
	2	40	<	10	—	—
	3	30	—	30	—	—

註) —：左右の理解度、満足度が同じ  
 /：右の理解度、満足度が高い  
 <：左の理解度、満足度が高い

表10：各理解度、満足度の高低パターン（科目数）

	(1)講義の理解度 (2)教材の理解度	(3)試験の理解度 (4)解答の満足度	(2)教材の理解度 (3)試験の理解度	(4)解答の満足度 (5)レポートの満足度
上下同じ(一)	13 (62%)	7 (58%)	5 (45%)	8 (67%)
下が高い(∨)	5 (24%)	0 (0%)	5 (45%)	4 (33%)
上が高い(∧)	3 (14%)	5 (42%)	1 (9%)	0 (0%)
計	21	12	11	12

まず、(1)「講義の理解度」と(2)「教材の理解度」から見ていく。この二つはどちらも講義における理解度だが、前者が音声言語の理解、後者が書かれたものに対する理解である。どちらも同程度に難しいとした科目は全体（21科目）のうち13科目で60%を越えている。また「講義の理解度」のほうが低い（難しい）科目は5科目（24%）、「教材の理解度」が低い科目は3科目（14%）となっている。全体としては、特にどちらかを難しくと感じているとは言えない。むしろ、どちらも難しくと思っている科目が最も目立って多い。

次は、(3)「試験の理解度」と(4)「解答の満足度」である。両者は、共に試験における難しさの程度であるが、前者は書かれた問題を読んだ理解の程度であるのに対し、後者は解答を日本語で表現した際の満足の程度である。どちらも同程度に難しい場合と後者の表現に対する満足度が低い（難しい）場合とが、それぞれ7科目（58%）、5科目（42%）とほぼ半々の科目数となっている。それに対し、前者の問題の理解度のほうが難しいとした学生はいなかった。試験においては、問題も解答も難しいか、あるいは問題の理解より解答を書くことのほうに困難を感じている。

三番目は、講義での(2)「教材の理解度」と(3)「試験の理解度」である。二つとも書かれた日本語を読んで理解する点では共通しているものの、前者は講義、後者は試験での読解というように目的も場面も異なっている。両方とも同程度に難しいと感じている場合も、前者の講義での理解度のほうが難しいとする場合も、

それぞれに5科目(45%)である。また、後者のほうが難しいとしたのは、学生8、第1科目の場合の1科目だけである。その場合も双方の理解度は70%と60%と言うように比較的高い。全体としては、どちらも同程度に難しいか、あるいは試験問題の読解のほうが難しくないと感じている。これに対し、後者のほうが難しいと感じている場合はほとんどない。

最後に、試験の(4)「解答の満足度」と(5)「レポートの満足度」である。両方とも学生が日本語で表現したものに対する学生自身の満足の程度であるが、前者と後者では、試験とレポートいうようにそれを書く場面、状況が異なっている。どちらも同じという場合が8科目(67%)で最も多く、次いで試験の解答のほうが難しいとする場合が4科目(33%)で続いている。それに対し、レポートのほうが難しいという回答はない。多くの科目では前者、後者どちらも同じくらい難しいと感じているが、試験の解答のほうにより困難を感じている科目も3分の2程度ある。

以上の四つの組み合わせで困難と感じている点を見ると、どの組み合わせでも多い回答は、どちらも同程度に難しいということである。特にどれが難しいというのではなく、全般的にどれも難しいと感じていると考えることができる。さらに詳しく見てみると、講義での日本語理解及び試験での解答に比べ試験問題の理解度が相対的に最も困難と感じる程度が低い。また、レポートより試験での解答に比較的難しさを感じていると言うことになる。

#### 4.6. 自身の日本語能力について

次に、学部での勉強全体を通して学生がどのように自身の日本語能力について考えているのかを、次の点から見ていく。

- ・別科と学部での勉強とで最も異なる点、
- ・学部進学後、自身の日本語は上達したか、そしてそれはなぜか、
- ・大学での勉強で、今最も必要な、または不足している日本語能力。

さらに、これまで見てきた難しい科目に関する結果と照らし合わせながら、学部の勉強全体の中での学生の困難を再度分析していく。

また、ここでの分析の対象には、難しい科目の結果を検討する際に排除してきた学生3と7も加えていくこととする。

#### 4.6.1. 別科と学部の違い

学生は別科から学部に進学して、それらの違いをどのように捉えているのだろうか。自由回答で答えてもらった結果が表11である。

表11:別科と学部との違い

別科と学部の違い	学生No.											計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11		
1. 出席が厳しくない	1	1											2
2. 日本語を話す機会が多い		1											1
3. 関心のある科目が勉強できる		1											1
4. 先生の説明が速い			1										1
5. 先生に相談する時間が少ない				1									1
6. 日本語を勉強する機会が少ない					1	1		1	1	1	1		6
7. 自主的に勉強しなければならない					1			1					2
8. 多人数の授業が多い							1						1
9. 休講が多い							1						1
10. 一生懸命勉強しなくてもよい							1						1
11. 出席が第一になってあまり勉強しない										1			1

自由に答えを書いてもらった結果、表11にある11項目の回答があった。それらの回答のうち、別科と学部との違いとして学部の状況を積極的に評価していると思われるものは1から3の三つである。残りの8項目は、推薦されてやっと念願の学部へ進学できたという別科修了生の事情を踏まえると、マイナスの評価と考えることができる。さらに、プラス評価と考えられる三つを回答しているのは学生1と2の二人だけで、他の9人の学部での勉強に対する見方はどちらかと言えば否定的である。

回答数についてみると、6「日本語を勉強する機会が少ない」を除けば、1「出席が厳しくない」、7「自主的に勉強しなければならない」がそれぞれ2回答、そのほかは全て一つずつの回答となっている。6「日本語を勉強する機会が

少ない」は半数以上の6名が指摘し、最も目立った回答項目となっている。

別科での勉強に比べると、学部での勉強は、推薦制度によって進学した別科修了生にとって、どちらかと言えばあまり積極的に評価できる学習環境ではない。特に、別科での日本語課程が修了しているにもかかわらず、日本語が勉強できる機会が少ないことを最も大きな違いとして考えている。このことは、日本語の学習がさらに必要だと感じていることの現われと考えることもでき、その要求が十分に満たせないまま学部での勉強が進んでいっているのである。

#### 4.6.2. 学部で日本語は進歩したか

日本語学習の場であった別科から学部へ進学し、学生は自身の日本語能力についてどう考えているのか。日本語は進歩したのか、それとも後退してしまったのか。表12は学生自身が考えている自身の日本語の上達の程度及びその理由を答えてもらった結果である。

表12：自身の日本語上達度とその理由

日本語は上達したか	学生No.											計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11		
とても上達した(+3)		1											1
(+2)			1			1							2
(+1)					1		1		1			1	4
変わらない(±0)	1			1				1			1		4
(-1)													0
(-2)													0
とても下手になった(-3)													0
どうして													
1. 講義を理解しなければならない						1	1						2
2. よく日本人学生と話す						1			1				2
3. いろいろな本を読んだ							1						1
4. わかからない								1					1
5. 留学生用の日本語の授業がない											1		1

学部に入ってから、日本語が上達したと思っているのは、7名、別科のときと変わらないとしたのが4名である。下手になったと感じている学生はいない。別



科での勉強や学生生活に比べ、日本語学習のためにコントロールされた日本語に触れる機会が圧倒的に少なくなり、それに代わって日本人学生（日本語母語話者）と同様に勉強し、大学生活を送ることになったという言語環境の変化からすれば、少なくとも下手にはなっていないとしているのは、納得できる。

ところが、上達したと感じている度合いを見てみると、とても上達した（+3）としているのは学生2の一人だけである。さらに、中程度の進歩（+2）と答えたのも学生3と6の2名にすぎない。他の8名はすこし進歩した（+1）か変わらない（±0）である。学部での勉強の中で、日本語は別科の時と同じか、または上達したと考えているものの、その進歩の程度はあまり高くない。少なくとも、大きな著しい進歩はないのである。

次に、なぜ学生たちはそう感じているのか。その理由を答えてくれたのは5名だけであった。学生7の4「わからない」を除けば、4名しか回答していない。それでも、その理由を見てみると、1「講義を理解しなければならない」2「よく日本人と話す」3「いろいろ本を読んだ」は学生たちの置かれている日本語環境をあらわしている。これらの三つの理由を書いたのは、学生5、6、9の3名で、進歩したと考えている学生たちである。その中でも学生6は中程度（+2）に進歩したと答えた。さらに、5「留学生用の日本語の授業がない」と答えたのは学生10で、進歩していないと回答している。

先に見たように、学部では日本語を勉強する機会が少ないと考えている学生が多い。これは学生たちが自らの日本語能力をまだまだ不十分だと思っているためである。このことをここで見た学生の日本語能力の自己評価と合わせてみると、学部で、言わば『生の』日本語に触れる機会が多いにもかかわらず、そのような日本語の環境が十分に自身の日本語能力の向上に結び付いていないと感じているのである。

#### 4.6.3. 不足している日本語能力

自らの日本語能力は不十分だと感じている。では、どのような能力あるいは知識が足りない、または必要だと思っているのか。自由回答形式で答えてもらった

結果をまとめたのが表13である。

表13：不足している及び必要な日本語能力と知識

不足している/必要な日本語	学生No.											計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
1. 速く読んでわかる	1						1					2
2. 講義を忘れないようにする			1									1
3. (講義で)メモやノートをとる			1	1				1	1			4
4. 講義を聞いてすぐわかる					1	1			1		1	4
5. 専門用語		1					1	1				3
6. 外来語		1							1	1		3
7. 語彙(熟語や副詞なども含む)			1	1							1	3
8. 文法		1										1
9. 文章(レポートや論文)を書く								1		1		2
10. 自分の考えを日本語で書く					1							1
11. 日本語らしい表現							1					1
計	1	3	3	2	2	1	3	3	3	2	2	25

表13にあるように、11項目の回答を得た。それらを大別すると、1から4は講義を聞いたり、本などを読んだりして理解するときに必要な能力で、9から11は日本語で、特に文章で何らかのことを表現するときに求められる能力である。また、残りの5から8までは日本語そのものの知識であり、読み書きなどの技能に関わりなく必要となるものである。これらの三つのグループ別にその回答数を見ても、理解に必要な能力は11、日本語の知識は10、とほぼ同数であるのに対し、表現に必要な能力は4回答で、他のグループの半数以下となっている。さらに、この回答数の多い二つのグループには、それぞれ9名と8名の学生が回答している。

そこで、この二つのグループについて詳しく見ていくことにする。まず、理解の能力では、3「(講義で)メモやノートを取る」4「講義を聞いてすぐわかる」がそれぞれ4回答ずつを得ている。いずれも、講義を聞く際に必要な能力であり、回答数も合計すると8となり全回答数25の約3分の1に当たる。次に、日本語の知識を見ると、8「文法」以外はどれも語彙の知識であり、3回答ずつで、合計9

となっている。これも全回答数の約3分の1を占めていることになる。つまり、講義を理解する能力と知っている語彙の量が、学生が自分に不足していて必要だと考えている日本語ということになる。

#### 4.6.4. 難しい科目における困難と必要な日本語能力

ここまで、学生に選択してもらった難しい科目についての度合いと理由、そして学部での勉強全体で必要だと感じている自身の日本語能力について分析してきた。では、それらを合わせて見る時、学生が抱えているどんな困難が見えて来るのだろうか。

難しい科目の項(4.1. から4.4)では、講義、試験において「専門用語」に多くの学生が困難を感じていた。また、自身の日本語についての分析でも、表13にあるように「専門用語」が最も不足しているとする回答があった。他に「外来語」とした回答もあったが、この中にはカタカナの「専門用語」も少なからず含まれていると考えられる。というのも日本語の場合特に欧米語からの外来語はカタカナで表記するため、それが外来語であることは一見して推測がつくが、それが専門用語であるかどうかを知るには専門的な知識が必要になるからである。まだ専門知識にも乏しい学生にその区別がきちんとできているとは考えにくい。そう考えると、難しい科目においての回答と自身の日本語についての回答に共通点が見出せる。さらに、必要な日本語として「専門用語」を始めとする語彙の知識をあげていたが、これは日本語を理解する時だけではなく、表現する際にも必要となってくるものである。

さらに、難しい科目において、試験の解答とレポートでは、自分の思ったことを日本語でちゃんと表現すること、またはそうするための日本語の使い方に困難を感じていた。不足している日本語についての回答でも、日本語で表現する能力の不足を答えた学生があった。ところが、その数は比較的少数で、むしろ講義理解の能力が必要とする回答のほうが多かったのである。このことは、日本語を書いて表現することよりも、日本語での講義を聞くことのほうにより困難を感じていると考えることではないだろうか。

ところが、難しい科目における各理解度と満足度の比較では、特に難しいというものはなく、どれも同程度の難しいと答えていることを見た。そうすると、上の分析と矛盾した結果になってしまう。これはどう考えればよいのだろうか。一つ考えられることは、アンケートにおける質問の仕方である。つまり、講義、試験、レポートしかもそれぞれに理解する場合と表現する場合と別々に質問すると、やはりそれぞれに難しいのである。その一方で、特にある科目あるいはその一部分を特定せずに漠然と不足している日本語について質問すると、普段多く経験し、難しいと感じることの多い講義でのことが回答の際に思い出しやすくなるのではないか。

#### 4.7. 時間割作成の基準

最後に、これまでの結果に関連して一つ考えておきたいことは、学生が自分の時間割を作成する際に、どんな規準で科目を選択しているかということである。時間割作成の際に優先したことについて選択肢の中から及び自由回答で答えてもらった。その結果が表14である。

表14:時間割作成時に優先したこと

優先したこと	学生No.											計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
1.おもしろそうな科目			1			1		1				3
2.試験や課題が簡単(単位が取りやすい)	1	1			1			1	1	1	1	7
3.休みの日、時間を作る												0
4.もう決まっていて自由を選べない		1		1								2
5.将来役に立つ								1				1

回答のあった11名の学生のうち、4「もう決まっていて自由を選べない」しか選ばなかった学生4の1名を除くと、あとの10名中7名が、2「単位が取りやすい」ことを優先している。しかも、難しい科目の分析のときに、難しさの程度が低いとして排除した学生3と7は、この7名には含まれていない。つまり、残りの8名のうち、2「単位が取りやすい」を選ばなかったのは、学生6の1名だけで

ある。ほとんどの学生が試験や課題などがやさしいかどうかで時間割の科目を選んでいることになる。このことは、学部での勉強が始まる前に既に、学部での勉強に対して「難しい」という自覚をもっていると考えられる。

## 5. まとめ

本報告では、本学推薦制度によって学部へ進学した別科修了生の日本語の問題点について彼らがどのように感じているのかを見てきた。その結果、学部での勉強全体から見ると、講義を理解する能力がより必要だと感じているものの、難しいとして選んだ科目については、講義、試験、レポートの各部分について特にどれが難しいということはなく、どれも難しいと感じていた。そして、その難しい理由では、「専門用語」の多用が学生の最も大きな困難となっていた。そうした学生たちは自分自身の日本語について、日本人学生と共に勉強を進めていく日本語環境のなかであって、日本語の後退はないものの進歩もあまりしていないと感じていた。また、時間割作成に際しても多くの学生が単位のとりやすさを優先に考えていた。

本調査の出発点は、別科のコース・デザインの見直しにあった。どのように改善していくかを探るために、まず修了生の追跡調査を行ったのである。これまでの結果を踏まえると、「専門用語」の多用への対応が一つの見直しの方向として考えられる。さらに、学部での日本語環境においても自らの日本語の向上に努められるようにすること。最後に、学部へ進学する前に、学部での日本語による講義などに関する心理的な準備も必要であろう。

## 6. 今後の課題

今回の調査は、別科コース・デザインの見直しということで始まったが、まだ第一歩を踏み出したに過ぎず、実際に見直しを行っていくためには、問題点も多い。まず第一は、調査対象者数が11名であったということである。現在比較的連絡がつきやすい一、二年生を主な対象としたが、その総数は33名であり、連絡等の条件が許せば全数による調査も可能な規模であった。したがって、出発点としての

意義はあるにせよ、ここでの結果を一般化することはできない。

第二に、難しい理由として学生が答えた「専門用語」である。では、何を「専門」用語と呼ぶのか。学生（1、2年生）の履修科目には、その専門分野との関連が必ずしも強いとは言えないものもある。このことに関して、平尾（1999）は、学習者がわからない語だと判断する語や表現を次のように分類している。①「講義の中で提供された概念や知識を表す専門性の高い語」を専門用語、②「その分野の研究において中等教育レベルで紹介される概念や知識をあらわす」語を学問用語、③「一般的な概念や知識を表す未習の」一般用語。さらに、日本語能力の低い者にはこれらを判別することができず、全てを難しい語と認識してしまう。では、アンケートに答えた学生はどんな判断で専門用語としたのだろうか。今回の調査からはそれを知ることはできないが、学生（別科修生）の日本語力が比較的低いこと、それらを判別するための専門知識にまだ乏しいことを考えると、わからない、難解な語の総称として専門用語としたとも推測できる。より詳細な調査が必要である。

第三の問題点は、今回の調査で難しい科目について、講義、試験、レポートと大きく三つの部分に分けて別々に扱ったことである。というのも、学部での授業では、講義と試験あるいはレポートが関連していて、それを一連の活動と見なす必要がある（平尾、1999）とする見方もあるからである。今回の調査においても、2名の学生が難しい科目として選んでおきながら、アンケートで提示したカテゴリーでは難しくないと回答していた。これは、一つ一つの部分ではなく全体として見た時に困難を感じていた可能性も否定できない。しかし、この点についてはさらなる調査が必要である。

また、それぞれの部分、例えば講義を聞いて理解することについても、そこで必要とされる日本語能力のさらに詳しい分析も必要となるであろう。例えば、平尾（1999）は試験での答案が書けるように講義を聞くとはどういうことか、またそこで学習者が抱えている困難、さらにはその困難を解決する方法を考察している。また、山本（1994、1995）は上級における聴解に焦点を当て、そこで必要とされるさまざまな知識を構造的に捉えようとしている。

今回は、別科修了生が直面している問題を全体的に捉えようとしたが、個々の学生はそれぞれに異なる問題にも悩まされているはずである。それらを知るためには、学生の属性（母語、学年、学科、男女、修了時の日本語力など）による困難の違いを見ても重要となってくる。これが第四番目の問題点である。

最後に、困難な点だけを見ているのではなく、学生たちがそうした困難に対してどのように対応し解決しようとしているのかを知ることも必要である。別科の一年間だけで問題なく学部の授業について行けるだけの十分な日本語能力を身につけることは難しい。学部に進学してからも日本語能力を向上させていくためには、そうした学生の対応を助けられるような活動をカリキュラムの中に組み込むことも必要だと考えるからである。

#### 参考文献

大河原 尚 (1998) 「別科の現状と今後の課題」『別科論集』創刊号、大東文化大学別科日本語研修課程、99～109頁。

大東文化大学 (1999) 『2000別科日本語研修課程募集要項』。

田中 望 (1988) 『日本語教育の方法』大修館書店。

平尾 得子 (1999) 「聴解講義能力に関する一考察 —講義聴解の特徴と日本語学習者が抱える問題点—」『日本語・日本文化』25号、大阪外国語大学留学生日本語教育センター、1～21頁。

山本富美子 (1994) 「上級聴解力を支える下位知識の分析 —その階層構造について—」『日本語教育』82号、34～46頁。

山本富美子 (1995) 「講義、対話等の聴解のメカニズム —テキスト分析を通して—」『日本語教育』86号、13～25頁。

## 資料 I : アンケート項目

### I 【大学での勉強について】

#### 勉強した科目について

- 時間割作成の時どんなことを優先したか。

- ①おもしろそうな科目      ②試験や課題が簡単(単位が取りやすい)  
③休みの日、時間を作る      ④もう決まっていて自由に選べない  
⑤その他

- 難しかった、あるいは大変だった科目はどのくらいありましたか。

- ①ありません    ②1~3、    ③4~6、    ④7~9、    ⑤10以上

今まで勉強した科目のなかで、いちばん難しかった、大変だった科目を 三つ

書いてください。

(      科      目      名      )(いつ勉強しましたか)(科目の種類)

例)( 日 本 語 演 習 1 1 )(1・2年、前・後期)(必須、選択、自由)

①(      ) (1・2年、前・後期)(必須、選択、自由)

②(      ) (1・2年、前・後期)(必須、選択、自由)

③(      ) (1・2年、前・後期)(必須、選択、自由)

難しかった、大変だった科目 (上の①~②に書いた) について

#### ①の科目について

- 講義について

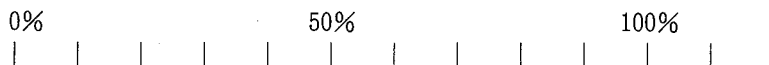
1. 先生の教え方はどうでしたか。

- ①わからないところや難しいところを何度も繰り返して教える  
②留学生にも熱心に教える      ③ゆっくり話す  
④あまり説明しない      ⑤話し方がとても速い  
⑥黒板にあまり書かない      ⑦よく黒板に書く  
⑧専門用語をたくさん使う      ⑨例を使って説明する

その他



2. 先生が使う日本語がどのくらいわかりましたか。



3. 講義のときに使われる教科書や教材がどのくらいわかりましたか。



何が難しかったですか。

- ①何が難しいかよくわからない
- ②カタカナの専門用語
- ③漢字の専門用語
- ④日本語はわかるが、内容がわからない
- ⑤その他

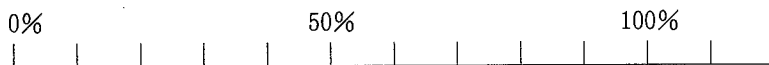
●試験について

1. 試験の問題の日本語がわかりましたか。



何が難しかったですか。

2. 思った通りに答えられましたか。



何が難しかったですか。

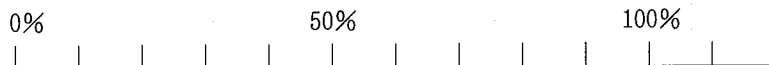
●レポートについて

1. レポートの課題がありましたか。 ①あった ②なかった

どんなことを書くレポートでしたか。

- ①自分の意見
- ②一つの本を読んでまとめる
- ③いろいろな本を読んでまとめる
- ④自分の経験（国で、日本で）についてまとめる
- ⑤その他

2. 思った通りに書けましたか。(何が難しかったか)



何が難しかったですか。

勉強全体について

大学での勉強は、別科での勉強と比べて何が一番違いますか。

(例：日本語を勉強する機会が少ない、自主的に勉強できる、一生懸命勉強しなくてもいい、出席が厳しくないので休める、など)

大学での勉強（講義、試験など）のために、今のあなたに一番必要な日本語はどんな日本語ですか。

(例：講義を聞いてすぐわかる能力、メモやノートを取る能力、専門用語、聞いた日本語を忘れない能力、速く読んでわかる能力、など)

これまでの大学での勉強（先生について、日本人学生について、日本語の勉強について、講義についてなど何でもいいです）について感想がありますか。

## II 【あなたの日本語について】

大学に入ってから、あなたの日本語は上達しましたか。

とても下手になった                      変わらない                      とても上手になった

--	--	--	--	--	--

どうしてだと思いますか。

今一番足りない日本語はどんな日本語ですか。